



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

『金色夜叉』本文の助詞の異同について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北澤,尚, 許,哲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107169

『金色夜叉』本文の助詞の異同について*

北 澤 尚**・許 哲***

日本語・日本文学****

(2009年8月31日受理)

要 旨

尾崎紅葉の未完の長編小説『金色夜叉』には、様々な本文が存在しており、それらの間には少なからぬ異同が認められることが先行研究によって既に指摘されている。本稿では、北澤尚・許哲(2009b)に続いて、『金色夜叉』における助詞の異同について、明治30年1月1日から明治35年5月11日まで断続的に連載された讀賣新聞の初出本文と初出後最初に活字化された春陽堂初版本(及び『新小説』掲載本文)とを対照して考察した。その結果、以下の点が明らかになった。①格助詞に関する異同が120例(30.0%)、係助詞が94例(23.6%)、接続助詞が83例(20.8%)、終助詞が32例(8.0%)、複合助詞が10例(2.5%)、準体助詞が8例(2.0%)、副助詞が7例(1.7%)、その他が45例(11.3%)となる。格助詞、係助詞、接続助詞、終助詞の異同の合計は329例で、全体の82.5%を占める。②異同の内容は、「変更」が195例(48.9%)、「付加」が108例(27.1%)、「削除」が96例(24.1%)であり、「変更」が約半数を占める。③各編ごとに異同の多い順に見ると、中編147例(36.8%)、後編116例(29.1%)、前編57例(14.3%)、続続33例(8.3%)、続編29例(7.3%)、新続17例(4.3%)である。中編と後編だけで全体の約3分の2を占めている。

キーワード：尾崎紅葉，金色夜叉，本文批評，テキスト，読売新聞，春陽堂，初出本文，初版本，本文の異同，助詞

1. 本稿の目的

日本語史の研究のために、ある時代の文献から用例の採集を行い帰納的方法によって当時の言語実態を明らかにしようとする場合、その文献の本文(テキスト)の特性を十分吟味しておくことが求められる。

明治時代語の研究においても同様であるが、文献資料は、量の膨大さとジャンルの多様さにおいて、それ以前とは比較にならないほど豊富であり、その全貌を知るのは困難をきわめる。そのような中で、特に、尾崎紅葉の作品については、松村明(1957)に以下のような指摘がある。「……言文一致体の文章には、いろいろの調のものが試みられたが、特に紅葉は『青葡萄』(明治28年)『多情多恨』(同29年)の二作において、『である』調の言文一致体の文章を完成し、以後の小説家らで『である』調の言文一致を試みる者が多く出るようになった。……保科孝一氏『国語学精義』(明治43年)にも、『紅葉の金色夜叉多情多恨等において精鍊修琢を加へた立派な東京語を見ることが出来る。』(同書、301頁)とある。したがって、言文一致体の文章の普及につれて、これが東京語の共通語化を促進することになったのであり、またその反面に、それらの表現が逆に東京

* On the Different Use of Particles in Two Versions of the Main Text of "Konjiki-Yasha" / KITAZAWA Takashi, HO Chol

** 東京学芸大学教育学部(人文社会科学系 日本語・日本文学研究講座)所属

*** 明治大学大学院 文学研究科 日本文学専攻 博士後期課程

**** 184-8501 小金井市貫井北町4-1-1

語を規定していく結果をも時に生ずることがあるようになった。……」(97頁～99頁)

紅葉の畢生の大作『金色夜叉』は、以上のような理由で、明治時代の言語の実態を解明するための資料として使用されることが多い。ただし、その際にも、『金色夜叉』に諸本がありそれらの間に本文上の異同が少なからず見られるという事実は看過し得ない。この点については古くから先行研究において指摘があったが、その詳細な分析が、近年、木川あづさ(2007)と、北澤尚・許哲(2008・2009a・2009b)によって進められつつある。

本稿は、北澤尚・許哲(2009b)に続いて、『金色夜叉』における助詞の異同について、明治30年1月1日から明治35年5月11日まで断続的に連載された讀賣新聞の初出本文と、初出後最初に活字化された春陽堂初版本文(及び『新小説』掲載本文)とを対照して考察することを目的とする。

2. 尾崎紅葉と『金色夜叉』

2.1 尾崎紅葉について

1868(慶応3)年12月16日-1903(明治36)年10月30日。小説家。本名徳太郎。別号も多数ある。江戸の芝中門前町に生れた(12/27出生説もある)。母が明治5年、紅葉満4歳のときに病没したので、母方の祖父荒木舜庵の家に引取られ、芝神明町で育った。舜庵は京都で修行した漢方医で、出身地は近江。したがって、紅葉は江戸っ子作家とみられていても、実は半ば関西人の血統であった。父の惣蔵は奇人だったので、紅葉は父との関係を極度に秘した。

紅葉は桜川小、府立二中(後の一中)、岡鹿門塾、三田英学校などを経て16年9月、15歳で大学予備門(一高)に入学、この頃までに同級生の文学趣味の団体に参加して漢詩文を作った。18年2月予備門二年のときに山田美妙、石橋思案、丸岡九華らと硯友社(近代日本最初の純文学結社)を結成した。硯友社は同年5月、機関誌「我楽多文庫」(近代日本最初の純文学雑誌)を手写回覧本の形で創刊した。21年9月、東大法科一年へ進学、翌年9月、同和文学科一年へ転科、翌23年7月、学年試験に二度目の落第をして退学。しかし、その前年12月にすでに新進作家として讀賣新聞社に入社している。晩年は胃がんで苦しみ、35歳の若さで病没した。なお、生涯の代表作は以下の四期に分けられる。

【第一期】明治18年～22年。「我楽多文庫」に処女作『江嶋土産滑稽貝屏風』(明18)を発表。『修紫怒気鉢巻』(明19～20)。『二人比丘尼色懺悔』(明22)は、17世紀の浄瑠璃と仮名草子の影響があり出世作となる。

『娘博士』(明20)等清新なハイカラ趣味の当世的風俗小説も。

【第二期】明治22年11月～25年。『伽羅枕』(明23)、『三人妻』(明25)などの元禄復興文学。『焼つぎ茶碗』(明24)で心理主義的テーマを採り上げ、『二人女房』(明24～25)で口語文への発足を示した。

【第三期】明治26年～29年。『心の闇』(明26)、『多情多恨』(明29)。内容的には綿々たる心理描写の小説を、文体的にはそれにふさわしい「である」体の口語文を成熟させた。

【第四期】明治30年～35年。『金色夜叉』の断続的発表。

2.2 『金色夜叉』の初出本文と初版本文

『金色夜叉』は、最初に讀賣新聞紙上で明治30年1月1日から始まり、同35年5月11日まで六年間、計236回にわたって断続的に掲載された。その初出掲載年月日を以下に示す。a～fの記号は本稿が便宜上付したものである。

- a 「金色夜叉」(壹)～(八)……………明治30年1月1日～同年2月23日(計32回)
- b 「後篇金色夜叉」(壹)～(八)……………明治30年9月5日～同年11月6日(計52回)
- c 「續金色夜叉」(壹)～(七)……………明治31年1月14日～同年4月1日(計49回)
- d 「續々金色夜叉」(壹)～(六)……………明治32年1月1日～同年5月28日(計57回)
- e 「續々金色夜叉」(七)～(十三)……………明治33年12月4日～34年4月8日(計32回)
- f 「續々金色夜叉續篇」(壹)～(三)……………明治35年4月1日～同年5月11日(計14回)

なお、上記fの「續々金色夜叉續篇」のうち、(壹)と(二)が『新小説』(明治36年1月号・2月号・3月号)に「新續金色夜叉」の題名で再掲された。『尾崎紅葉全集』第六卷(中央公論社、1941)の塩田良平氏の

「解題」に以下の指摘がある。

(三) 紅葉が讀賣を去つたために、「金色夜叉」完結編を雑誌「新小説」に載せようとして、まづ新聞既載の最後の三章を「新續」と名付けて、再掲した。そして、それに續けて筆を起さうとしたのであつたが、紅葉の病が進んだため遂に起稿し得ず、そのまゝ中絶してしまつた。この本文について、紅葉は左の如く断つてゐる。／本篇の稿を續かば、宮が再度の書信の半より為ざるべからざるを、さては唐突に過ぎて、讀者の便悪からんを思ひ、且く讀賣新聞の所載を訂して、此巻の首に眞き、次第に號を逐ひ筆を着けて後段の腹案に及ばんとす。婆心或は摯なりと雖も、敢て漫に舊稿を録して、其責を塞がんとにはあらざる也(著者誌、新小説一月附録)／右によれば「且く讀賣新聞の所載を訂して」とある。従つて、この本文に多少の訂正があることが豫想されるが、實際は新聞本文と殆んど合致してゐて新に紅葉が加筆した形跡は認めない。しかも、新たに書きつぐべき個所に至つて紅葉は執筆不能に陥り、同誌三十六年四月の時報には、／毎月本誌に掲載すべき小説金色夜叉は作者紅葉氏病氣の爲、一時中絶する事となれり。／云々と報じて、そのまゝになつてしまつたのである。(577頁、原文は斜線部で改行。)

次に、「金色夜叉」の初版単行本は、讀賣新聞掲載分について、明治31年7月から明治36年6月にかけて、春陽堂から以下の順で刊行された。

『金色夜叉 前編』明治31年7月6日発行……(初出本文 a と対応)

『金色夜叉 中編』明治32年1月1日発行……(同上 b と対応)

『金色夜叉 後編』明治33年1月1日発行……(同上 c と対応)

『金色夜叉 續編』明治35年4月28日発行……(同上 d 及び e (七)(八) と対応)

『續々 金色夜叉』明治36年6月12日発行……(同上 e (九)～(十三) と対応)

讀賣新聞の初出本文から春陽堂の初版本文への改変については、上述の塩田氏の解題に次の指摘がある。

単行本「金色夜叉」で最も注目される點は、本文が新聞掲載のものと多少異なつてゐる事である。之は、紅葉が単行本にまとめるに當つて、字句に相當に修正を加へたからであつて、従つて、本文史の上からいへば単行本の方が更に作者の藝術的意志に近づいてゐるわけである。(578頁)

なお、『續々 金色夜叉』第七版(明治38年7月刊)には、『新小説』掲載の「新續金色夜叉」が含まれている。

3. 本稿の分類の枠組

本稿における助詞の異同の考察は、北澤尚・許哲(2008・2009a)における分類と対校表に依拠している。分類は、「1 符号の異同」「2 表記の異同」「3 語法の異同」「4 語句の異同」の四種類に大別し、それぞれ下位分類した。

1 符号の異同

読点の変更(→句点)／読点の付加／読点の削除／句点の変更(→読点)／句点の付加／句点の削除／その他の符号の変更／その他の符号の付加／その他の符号の削除

2 表記の異同

仮名遣いの変更／送り仮名の変更／ルビの仮名遣いの変更／ルビ(無→有)／反復記号の変更／濁音符(有→無)／濁音符(無→有)／漢字の変更／平仮名→漢字／漢字→平仮名／誤植

3 語法の異同

助詞の変更／助詞の付加／助詞の削除／助動詞の変更／助動詞の付加／助動詞の削除／助詞・助動詞間の異同／用言の活用の変更／用言の音便の変更／単文の複文化／複文の単文化／文の成分の語順転倒

4 語句の異同

名詞の異同／動詞の異同／形容詞の異同／形容動詞の異同／副詞の異同／接続詞の異同／感動詞の異同／語句・文章の変更／語句・文章の付加／語句・文章の削除

この中で助詞に係わる分類としては、「3 語法の異同」における「助詞の変更」、「助詞の付加」、「助詞の削除」、「助詞・助動詞間の異同」、「単文の複文化」、「複文の単文化」などがあるが、本稿では「助詞の異同」を

扱うことが目的であるので、「助詞の変更」、「助詞の付加」、「助詞の削除」のみを対象とし、助詞と助詞以外の品詞との間の変化を伴う「助詞・助動詞間の異同」、「単文の複文化」、「複文の単文化」については対象外とした。助詞は格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞・準体助詞・複合助詞の7種類に分類した。

対校するテキストは、讀賣新聞初出本文については、CD-ROM「明治の讀賣新聞」(読売新聞社メディア企画局データベース部、1999年刊)を用いた。春陽堂初版本文については、『精選 名著復刻全集 近代文学館』(ほるぷ、1980年刊)の複製本を用いた。『新小説』本文は、明治大学図書館所蔵『新小説 [マイクロフィッシュ版]』(日本近代文学館マイクロ編集委員会編、1989年刊)を用いた。(巻末の資料参照)

本稿で『新小説』本文を取り上げた理由は、このテキストが紅葉の存命中に本人によって改訂され、讀賣初出に続いて最初に再活字化されたものであり、紅葉亡き後に出版された春陽堂版の第七版に比肩すべきテキストとしての価値を持つものと判断したからである。したがって本稿では、『續々 金色夜叉』と「新續金色夜叉」を一緒にせず、分けて考察する。

なお、『新小説』に掲載されなかった「(三)」、「(三)の二」の二回分(讀賣新聞で明治35年5月5日、11日に掲載)については、今回の調査からは除外してあるが、更に調査を進めるつもりである。

4. 助詞の異同に関する考察

4.1 全体の様相

『金色夜叉』全編における助詞の異同の様相を見ると、下の表1ようになる。(表における空欄は0例である。以下の表でも同様である。)

表1を見るとわかるように、助詞の異同は全399例である。多い順に、格助詞が120例(30.0%)、係助詞が94例(23.6%)、接続助詞が83例(20.8%)、終助詞が32例(8.0%)、複合助詞が10例(2.5%)、準体助詞が8例(2.0%)、副助詞が7例(1.7%)、その他が45例(11.3%)となる。格助詞、係助詞、接続助詞、終助詞の異同の合計は329例で、全体の82.5%を占める。

異同の内容は、「変更」が195例(48.9%)、「付加」が108例(27.1%)、「削除」が96例(24.1%)である。「変更」が約半数で、積極的かつ意図的な改変であったことが予想される。

文の種類で見ると、「地の文」での異同が222例(55.6%)、「会話文」での異同は177例(44.4%)である。

表1 助詞の異同の様相

		前編			中編			後編			続編			続続			新続			小計			総計
		変更	付加	削除	変更	付加	削除	変更	付加	削除	変更	付加	削除	変更	付加	削除	変更	付加	削除	変更	付加	削除	
格助詞	地の文	9	4		14	10	4	7	7	5	5		1	5	2	2		2	1	40	25	13	78
	会話文	4	4	1	5	3	3	6	1	2	2	1	1	5	1			3		25	10	7	42
接続助詞	地の文	4	4	6	6	2	11	5	3	6	3	2	1	3		1		1	2	21	12	27	60
	会話文	1		1	3	1	2	6	3	3			1	1	1					11	5	7	23
係助詞	地の文	2	4	3	6	6	3	10	13	5	3	2		3	1	1		2	1	24	28	13	65
	会話文	1	2		2	1	4	4	3	5		2	2	1		1			1	8	8	13	29
副助詞	地の文		2						1				1									4	4
	会話文	1			2															3			3
終助詞	地の文					1																1	1
	会話文		3	1	4	3	3	6		6	1		1		2			1		11	9	11	31
準体助詞	地の文																						
	会話文								2	3					1	1			1		3	5	8
複合助詞	地の文				1	1		2									1			4	1		5
	会話文				1	2								1			1			3	2		5
その他	地の文				8			1												9			9
	会話文				35			1												36			36
小計	地の文	15	14	9	35	20	18	25	24	16	11	5	2	11	3	4	1	5	4	98	71	53	222
	会話文	7	9	3	52	10	12	23	9	19	3	3	5	8	5	2	4	1	2	97	37	43	177
総計		22	23	12	87	30	30	48	33	35	14	8	7	19	8	6	5	6	6	195	108	96	399
		57			147			116			29			33			17			399			

数の上では「地の文」の方が多いが、作品全体の「地の文」と「会話文」の割合とも関わっている事柄である。

各編ごとに異同の多い順に見ると、中編147例 (36.8%)、後編116例 (29.1%)、前編57例 (14.3%)、続続33例 (8.3%)、続編29例 (7.3%)、新続17例 (4.3%) である。中編と後編だけで全体の約3分の2を占めている。また、続編・続続・新続という作品の後半部における異同の少なさも特徴的である。

なお、各編の異同箇所全体に対する助詞の異同の割合は、前編、中編、後編、新続が約6～7%、続編と続続が約3～4%である。(北澤・許 (2008) と同 (2009a) を参照した。)

以下、助詞の種類別に「変更」、「付加」、「削除」の順に、例を挙げながらその特徴的な傾向を見ていく。例文の掲出は、上段が讀賣新聞初出本文、下段が春陽堂初版本本文および新小説本文であり、上段末尾には掲載年月日、下段末尾には編・頁・行を記した。(なお、各助詞の異同の数値は、「変更」については36頁の表2と37頁の表3、「付加」については38頁の表4と39頁の表5、「削除」については40頁の表6と41頁の表7に示した。)

4.2 格助詞

4.2.1 格助詞の変更

格助詞の変更は全65例と多いが、様々な変更が行なわれている。特に「が→の」が地の文で7例見られた。

(1)はそのうちの一つであり、(2)はその逆の「の→が」(全3例)の例である。

- (1) ……、満枝が色香に惑ひて、是は失敬、意外の麁相をしたるなりき。(明治30年9月9日) →
 ……、満枝の色香に惑ひて、是は失敬、意外の麁相をせるなりけり。(中編24頁1行)
- (2) 今彼の最愛の妻は、其一人を守るべき夫の目を眊めて、……(明治30年10月1日) →
 彼が最愛の妻は、其の一人を守るべき夫の目を眊めて、……(中編94頁3行)

また、格助詞の変更で最も注目されるのは、「へ→に」であり、作品全体の中での偏りがなく、全11例見られた。以下、全用例を示す。

- (3) 「あら、貫一さん、這麼所へ寐ちや困るわ。(明治30年1月17日) →
 「あら、貫一さん、這麼所に寐ちや困るわ。(前編49頁11行)
- (4) 世間には、馬車へ乗つて心配さうな青い顔をして、……(明治30年2月21日) →
 世間には、馬車に乗つて心配さうな青い顔をして、……(前編153頁11行)
- (5) ……、指す方も無く新橋へ向ひぬ。(明治30年9月10日) →
 ……、指す方も無く新橋に向へり。(中編24頁4行)
- (6) 先佞云ふ考で此商賣へ入つたのでありますから、……(明治30年9月15日) →
 先佞云ふ考で此の商賣に入つたのでありますから、……(中編45頁11行)
- (7) 「私も這麼事を口へ出します迄には、……(明治30年9月16日) →
 「私も這麼事を口に出します迄には、……(中編48頁2行)
- (8) 地へは落さじとやうに慌て周章き、……(明治31年3月18日) →
 地には落さじとやうに慌て憚き、……(後編134頁4行)
- (9) ……、内へ躍入ることもやあらば如何せんと、……(明治31年3月19日) →
 ……、内に躍入ることもやあらば如何せんと、……(後編138頁11行)
- (10) 一秒の塵の積める貳千餘圓の大金を何處へか振落し、……(明治32年1月1日) →
 一秒の塵の積める貳千餘圓の大金を何處にか振落し、……(続編2頁3行)
- (11) お宅へ参つて氣が違つたのですから、……(明治33年12月22日) →
 お宅に詣つて氣が違つたのですから、……(続編155頁9行)
- (12) それでは私への口上へ對しても、……(明治34年1月1日) →
 それでは私への口上に對しても、……(続編178頁7行)
- (13) 私も此間へ入つた以上は、……(明治34年3月21日) →
 私も此間に入つた以上は、……(続々95頁1行)

(3)(4)では動作の行われる場所を表わし、(5)(8)(9)(10)(11)(12)(13)では動作の向けられる方向・対象を示す。また、(6)(7)では、移動性・経過性の動作・作用についての目標・結果を示す。このような用法

の格助詞「へ」が「に」に変更されているが、反対に、「に」から「へ」への変更が全編を通じて次の(14)の一例しか見あたらないことから、「へ」から「に」への変更という傾向が顕著に見て取れる。

- (14) ……、此處こゝにまゐ参つたんで御座います。」(明治34年4月7日) →
 ……、爰こゝへ参つたんで御座います。」(続々124頁5行)

4.2.2 格助詞の付加

格助詞の付加では、「に」10例、「を」7例、「の」5例、「が」4例、「と」4例、「で」2例であった。以下に一例ずつ挙げる。

- (15) あのおほ大馬鹿者かものは一月十七日のばん晩き氣ちがが違つて、……(明治30年2月23日) →
 あのおほ大馬鹿者かものは一月十七日のばん晩に氣ちがが違つて、……(前編160頁7行)
- (16) ……、親おやも家いへも振捨ふりすて、……(明治31年1月24日) →
 ……、親おやも家いへも振捨ふりすて、……(後編39頁9行)
- (17) ……、其子そのこ失こせし後のち、彼かれは再びふた唯繼たづの子こをうば生うまじ、と固かたく心こゝろに誓ちかへるなりき。(明治31年2月3日) →
 ……、其子そのこ失こせし後のち、彼かれは再びふた唯繼たづの子こをうば生うまじ、と固かたく心こゝろに誓ちかひしなり。(後編39頁9行)
- (18) 「私わたくし自分じぶんにさへ存ぞんじませぬものを、……(明治31年2月25日) →
 「私わたくし自分じぶんにさへ存ぞんじませぬものを、……(後編95頁2行)
- (19) 行く水みづに數畫かずくよりも儂はかなき戀こひしさと可懐なつかしさの朝あさ夕ゆふに、……(明治30年9月30日) →
 行く水みづに數畫かずくよりも儂はかなき戀こひしさと可懐なつかしさの朝あさ夕ゆふに、……(中編89頁8行)

格助詞を加えることによって、(15)～(18)は格関係がより明瞭になっている。(19)は「AとBとの」にすることによって、並列表現としてより明確化した例である。

4.2.3 格助詞の削除

格助詞の削除は、「に」が6例、「の」「を」が各5例、「で」が3例見られた。格助詞の付加と削除を同時に見ると、他の種類の助詞では付加される助詞の種類に比べて削除される助詞の種類が少ないのに対して、格助詞ではいずれも6種類であった。このうち(21)は直行・直道父子の会話の中のものであるが、「の」を削除すると聞き手である息子(直道)も「同業者」の範疇に含まれ、他人事ではない言い方になる。

- (20) 始はじめには御前おんまへ様に不實ふじつの上うへに、又々また唯繼たづに不貞ふていなりと仰おほせられ候こゝろへども、……(明治35年4月3日) →
 始はじめには御前おんまへ様に不實ふじつの上うへに、今又いま唯繼たづに不貞ふていなりと仰おほせられ候こゝろへども、……
 (新続, 明治36年1月号215頁10行)
- (21) ……、我々われ同業者どうげふしやに對する人ひとの怨うらみなど、云いふものは、……(明治31年1月19日) →
 ……、我々われ同業者どうげふしやに對する人ひとの怨うらみなど、云いふものは、……(後編21頁3行)
- (22) 命いのちを懸かけて貴方あなたを思おもふものがございまして？」(明治30年9月16日) →
 命いのち懸かけて貴方あなたを思おもふ者ものがございまして？」(中編46頁12行)

4.3 接続助詞

4.3.1 接続助詞の変更

接続助詞の変更は、そのほとんどが孤例であるが、「ば→は」が7例、「ど→と」が3例、「が→か」「と→を」「ど→が」が各2例である。

- (23) ……、宮みやは聲こゑの限かぎりに呼よべば、男をとこの聲こゑは遙はるかに來きたりぬ。(明治30年2月23日) →
 ……、宮みやは聲こゑの限かぎりに呼よべは、男をとこの聲こゑも遙はるかに來きたりぬ。(前編163頁4行)
- (24) 呼よべど號さけべど、宮みやは返かへらず、……(明治34年1月18日) →
 呼よべと號さけべと、宮みやは返かへらず、……(続編190頁1行)
- (25) 「僕ぼくは妻君さいくんの足あしを踏ふんだのだが、君きみは僕ぼくの面つらを踏ふんだ。」(明治30年10月12日) →
 「僕ぼくは妻君さいくんの足あしを踏ふんだのだか、君きみは僕ぼくの面つらを踏ふんだ。」(中編129頁8行)

(23)は「ば→は」、(24)は「ど→と」、(25)は「が→か」の例であるが、文意からすると各々変更前の「ば」「ど」「が」の方が適切である。今後、他の春陽堂初版本本文をも確認した上で「誤植」と扱うべきであると考えられる。

4.3.2 接続助詞の付加

接続助詞の付加では、「て」の付加が11例であった。下の(26)のように、動詞や形容詞の連用形に付加されるものが見られた。

- (26) ……、白齒しらの疎まばらなるを牙きばの如ごとく露あらはし、…… (明治31年3月16日) →
 ……、白齒しらの疎まばらなるを牙きばの如あらはして、…… (後編128頁8行)

4.3.3 接続助詞の削除

接続助詞の削除は、「付加」と対をなしており、「て」の削除が17例見られた。他にも、「が」の削除も5例見られた。(28)は、直行の満枝に対する言葉であるが、後続部分が省略された言いさし文から、言い切りの表現に変わっている。

- (27) 簾れんを巻まいて、月つきを邀むかへて酔よひ、…… (明治32年1月2日) →
 簾れんを巻まき、月つきを邀むかへて酔よひ、…… (続編5頁1行)
- (28) ……、以來いらいお出いで下さくだるのは何分なにぶんお断ことわり申まをしまするが。 (明治31年2月23日) →
 ……、以來いらいお出いで下さくだるのは何分なにぶんお断ことわり申まをしまする。 (後編87頁1行)

4.4 係助詞

4.4.1 係助詞の変更

係助詞の変更は、「は→も」が9例、「も→は」が7例、「は→の」が4例、「は→ば」が3例見られた。

- (29) 「僕は實際じつさい死しんだ弟おとよりは間はざまの居をらなくなつたのを悲かなむ。」 (明治30年9月8日) →
 「僕は實際じつさい死しんだ弟おとも間はざまの居をらなくなつたのを悲かなむ。」 (中編16頁8行)
- (30) 「尤もつとも年寄としよりだから嫌きらふ、若わかいから一いち概がいに好すくと、申まをす譯わけにも参まをりませんでございます。(明治31年2月25日) →
 「尤もつとも年寄としよりだから嫌きらふ、若わかいから一いち概がいに好すくと申まをす譯わけには参まをりませんでございます。(後編94頁1行)
- (31) 彼かれは電鈴でんれいを鳴ならして、…… (明治31年2月6日) →
 彼の電鈴でんれいを鳴ならして、…… (後編47頁5行)
- (32) 「待かて〜。」 と蒲田かまたは下司げす 扱あつかひに呼よび掛けて、(明治30年10月26日) →
 「待かて〜。」 と蒲田かまたは下司げす 扱あつかひに呼よび掛けて、(中編168頁1行)

4.4.2 係助詞の付加

係助詞の付加は「は」が23例、「も」が11例である。「は」の付加には、「を→をば」の例が10例、「に→には」の例が4例見られた。

- (33) 如何いに何なんでも餘あまり情なさけ無ない、宮みやさん、お前まへそれで自じ分に愛あい想そは盡つきないかい。(明治30年2月20日) →
 如何いに何なんでも餘あまり情なさけ無ない、宮みやさん、お前まへはそれで自じ分に愛あい相そは盡つきないかい。(前編149頁2行)
- (34) ……、それちを力ちからに病びやう中ちゆうながら筆ふで取りまらせ候。(明治35年4月1日) →
 ……、それちを力ちからに病びやう中ちゆうながら筆ふで取りまらせ候。(新続、明治36年1月号209頁6行)
- (35) ……、搦はつて措はくから畢ひつきやう竟ち持びやう病ちゆうになるのさ。」 (明治31年2月12日) →
 ……、放はつて措はくから畢ひつきやう竟ち持びやう病ちゆうにもなるのさ。」 (後編59頁10行)

4.4.3 係助詞の削除

係助詞の削除は、「は」が18例、「も」が7例あった。「は」の削除の中には、「には→に」が6例、「をば→を」が3例見られた。

- (36) ……、其その下道したみちの小暗をき空そらに五位ご鶯みさぎの魂切たまきる聲こゑは消きえて、…… (明治30年11月6日) →
 ……、其その下道したみちの小暗をき空そらに五位ご鶯みさぎの魂切たまきる聲こゑ消きえて、…… (中編196頁4行)
- (37) 宮みやが情なさけは我わが思おもふま、こまやかには濃こまやかならずとも、…… (明治30年2月4日) →
 宮みやが情なさけは我わが思おもふま、こまやかに濃こまやかならずとも、…… (前編95頁2行)
- (38) ……、私わたくしも座ざ興きやうで這こん魔な事を申まをしたのではございませんから。」 (明治30年9月15日) →
 ……、私わたくし座ざ興きやうで這こん魔な事を申まをしたのではございませんから。」 (中編42頁5行)

4.5 終助詞

4.5.1 終助詞の変更

終助詞の変更では、「わ→の」が3例、「よ→ぞ」が2例見られた。

- (39) 「可いわ、不承知なのよ。……、不承知なら不承知でも可いわ。」(明治31年2月16日) →
「可いの、不承知なのよ。……、不承知なら不承知でも可いの。」(後編72頁3行～5行)
- (40) それで、我々は決して利の高い金を安いと詐つて貸しはせんよ。(明治31年1月19日) →
それで我々は決して利の高い金を安いと詐つて貸しはせんぞ。(後編23頁6行)

4.5.2 終助詞の付加

終助詞の付加では、「よ」「な」が各2例見られた。「な」の2例は、命令表現に付加された例であった。

- (41) 隣合つて居たものだから私まで酷い目に遭されて。」(明治30年1月11日) →
隣合つて居たものだから私まで酷い目に遭されてよ。」(前編33頁6行)
- (42) 「お間に合せに之を召上りまし。」(明治30年9月10日) →
「お間に合せに之を召上りましな。」(中編27頁5行)

4.5.3 終助詞の削除

終助詞の削除では、「よ」「な」が各3例であった。

- (43) 「唯貨が欲しいのですよ。」(明治30年10月24日) →
「唯貨が欲しいのです。」(中編163頁4行)
- (44) ……、順しく還るやうにして還して下さいな。」(明治31年2月21日) →
……、順しく還るやうにして還して下さい。」(後編85頁5行)

終助詞の異同については、話し手と聞き手との関係も考慮に入れなくてはならないが、助詞の異同に限っては、特定の登場人物の発言に集中して改変されているという傾向性は見られなかった。

4.6 その他の助詞

その他の助詞の異同はすべて少数例である。その中で、(45)(46)のように、副助詞「など」に関連する例が見られた。

- (45) ……、其の金銭を奪取る高利貸など擇むものですか。」(明治30年9月15日) →
……、其の金銭を奪取る高利貸などを擇むものですか。」(中編43頁5行)
- (46) 如何したのか知らんなど、それは、……(明治30年9月29日) →
如何したのか知らんなんて、それは、……(中編87頁5行)

また、準体助詞「の」の異同で、「付加」が3例、「削除」が6例見られた。準体助詞の異同は全て会話部分である。

- (47) 「いや、其事なら何ふ必要は無いです。」(明治31年2月28日) →
「いや、其事なら何ふ必要は無いのです。」(後編100頁1行)
- (48) 但何故に貴下方は生きては居られんのですか。(明治34年3月21日) →
但何故に貴下方は生きて居られんですか。(続々93頁10行)

最後に、「が」から「か」への変更の問題について述べたい。

- (49) 相手が君であつたのが運の盡きざる所なのだ、……(明治30年10月18日) →
相手か君であつたのが運の盡きざる所なのだ、……(中編150頁10行)

(49)のように、主格を明示するために「が」と期待されるところが、「か」へと変更されたものが中編、後編で45例見られた。特に、中編に42例と集中していることは看過できない。活版印刷の活字として、濁点を別に付けなくてはならないのに付け忘れたという可能性も考えたが、中編を見る限り、「か」と「が」の活字はいささか異なり、「が」も含めて濁点符のついた字は、字本体と濁点の着き具合が調整され、活字の四角い枠に収まるものとする。

接続助詞の変更においても先述したように、濁点の有無と見られる異同に関しては、他の春陽堂初版本文をも確認した上で「誤植」と扱うべきであるとする。

5. おわりに

以上、『金色夜叉』本文における助詞の異同を精査し、全編における異同全399例について分析してきた。その結果として、以下の点が明らかになった。

- ・ 格助詞に関する異同が120例 (30.0%)、係助詞が94例 (23.6%)、接続助詞が83例 (20.8%)、終助詞が32例 (8.0%)、複合助詞が10例 (2.5%)、準体助詞が8例 (2.0%)、副助詞が7例 (1.7%)、その他が45例 (11.3%)となる。格助詞、係助詞、接続助詞、終助詞の異同の合計は329例で、全体の82.5%を占める。
- ・ 異同の内容は、「変更」が195例 (48.9%)、「付加」が108例 (27.1%)、「削除」が96例 (24.1%)であり、「変更」が約半数を占める
- ・ 各編ごとに異同の多い順に見ると、中編147例 (36.8%)、後編116例 (29.1%)、前編57例 (14.3%)、続続33例 (8.3%)、続編29例 (7.3%)、新続17例 (4.3%)である。中編と後編だけで全体の約3分の2を占めている。

今後は更に、『金色夜叉』における助詞の異同（即ち紅葉による改変）が、どのような言語意識や言語規範に基づくものであったかについて、紅葉の他の作品の本文や当時の文典（辞書や文法書）等を参照しつつ詳細に検討する必要がある。また、本稿では助詞の異同箇所を中心として論を進めたが、異同のない箇所との関係も詳細に分析されるべきである。さらには、今回対照した本文の他に重要と考えられる博文館版『紅葉全集第六巻』（明治37年12月刊）や春陽堂版第七版（明治38年7月刊、特に新続の含まれた「続続」）などとの比較も重要である。更に考察を深めていきたい。

参考文献

- 木川あづさ (2007) 『『金色夜叉』における新聞初出と初版本の本文異同について』
『実践國文學』第71号 実践国文学会
- 北澤 尚・許 哲 (2008) 『『金色夜叉』本文の国語学的研究 一前編・中編について一』
『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』第59集
- (2009a) 『『金色夜叉』本文の国語学的研究 II一後編・続編・続続について一』
『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』第60集
- (2009b) 『『金色夜叉』本文の助動詞の異同について』『日本近代語研究5』ひつじ書房
- 塩田 良平 (1970) 『明治文学論考』桜楓社
- 鈴木英夫・國澤裕美子・田中麻美 (1997, 1998, 1999)
『雪中梅』についての国語学的研究(その一, その二, その三)『国文白百合』28, 29, 30号
- 田中 章夫 (2001) 『近代日本語の文法と表現』明治書院
- 土佐 亨 (2005) 『紅葉文学の水脈』和泉書院
- 飛田 良文 (1992) 『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 増井 典夫 (1998) 「近代語資料における校訂の問題と資料性をめぐって」『愛知淑徳大学国語国文』21
————— (1999) 「近代語資料における校訂について」『愛知淑徳大学国語国文』22
- 松井 栄一 (1993) 「現代語研究のために—明治期以降の著作物のテキストについて—」
『国語と国文学』10月号
- 松村 明 (1957) 『江戸語東京語の研究』東京堂出版
- 山下 浩 (1993) 『本文の生態学 漱石・鷗外・芥川』日本エディタースクール出版部
————— (2001) 『漱石雑誌小説復刻全集 第三巻 坊っちゃん』「解題」ゆまに書房
- 湯浅 茂雄 (2000) 「近代語研究の要点と課題」『日本語学』九月臨時増刊号 第十九卷 第11号

表2 変更 (地の文)

	変更前	変更後	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計	
格助詞	が	の		4	2	1			7	
		を		1					1	
		は								
		も					1		1	
		か								
	の	が	2	1						3
		に				2				2
		を		1						1
		は			1	1				2
	に	の		1	1					2
		を	1		1					2
		と	2							2
		で								
	を	へ								
		は					1			1
		が	1							1
		に	1							1
		と	1							1
		は						1		1
	と	も		1						1
		など		1						1
		ばかり								
		の		1						1
	で	に								
		を	1	1			2			4
		で								
へ	か									
	かとも									
小計	9	14	7	5	5			40		
接続助詞	て	に								
		と								
		で								
	が	より		1					1	
		も				1			1	
	ば	か		1					1	
		が			1				1	
		に		1					1	
		と						1	1	
	と	は	3		2				5	
		を		1					1	
	ど	なら								
		ども								
		が		1	1				2	
		と				2	1		3	
	の	ば	1					1	1	
		ぞ					1		1	
つつ	ながら									
	て			1				1		
ども	ながら		1					1		
	ども									
とも	ども									
	でも									
小計	4	6	5	3	3			21		

	変更前	変更後	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
係助詞	は	が							
		の			3				3
		に			2				2
		を			1				1
		ば		1	1		1		3
		も	2	3				1	
	も	の					1		1
		は		2	2		1		5
		や				1			1
	ぞ	は			1				1
	や	も				1			1
か	な								
小計			2	6	10	3	3	24	
副助詞	でも	と							
	も	も							
	ほど	までに							
小計	などを								
	など								
終助詞	よ	ね							
		さ							
		ぞ							
	ね	から							
		な							
	わ	の							
のよ									
え	ね								
小計									
準体助詞	の								
複合助詞	には	にては						1	1
	では	も							
	もて	ても			1				1
	などと	なんて							
	なのなら	なら							
	なのだに	のに			1				1
とともに	より		1					1	
小計			1	2			1	4	
その他	が	か		8	1				9
合計			15	35	25	11	11	1	98

表3 変更 (会話文)

	変更前	変更後	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
格助詞	が	の							
		を							
		は		1	1				2
		も	1					1	2
		か			1				1
	の	でも						1	1
		が							
		に							
	に	を							
		と			1				1
		で					1		1
	を	へ					1		1
		は							
		が							
		に			1				1
		と							
	と	は							
		も		1			1		2
		など							
		ばかり						1	1
	で	の			1				1
		に	1						1
		を							
		で							
	へ	か							
かとも				1				1	
接続助詞	で	て		1				1	
	へ	に	2	2		2	1	7	
	小計		4	5	6	2	5	3	25
	て	に							
		と			1				1
		で		1					1
	が	より							
		も							
	ば	か		1					1
		が							
		にと	1						1
	と	て							
		は			2				2
ど	を								
	なら		1					1	
	ども								
の	が								
	と								
	ば								
につ	ぞ								
	ながら			1				1	
	つて								
ども	ながら								
	ども				1			1	
	ども				1			1	
んで	でも								
	ずに					1		1	
小計		1	3	6		1		11	

	変更前	変更後	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
係助詞	は	が		1					1
		の							
		に							
		を						1	1
		ば							
	も	も		1	2				3
		の							
		は		1	1				2
	ぞ	や							
		は							
	か	も							
な				1				1	
小計			1	2	4		1	8	
副助詞	でも	と	1						1
		も		1					1
	ほど	までに							
		などを			1				1
小計			1	2				3	
終助詞	よ	ね		1					1
		さ		1					1
		ぞ		1	1				2
		から			1				1
	ね	な				1			1
		の		1	2				3
	え	のよ			1				1
ね				1				1	
小計			4	6	1			11	
準体助詞	の								
複合助詞	には	にては							
		でも					1		1
	も	ても							
		なんて		1					1
	な	のなら						1	1
		のなら							
小計			1			1	1	3	
その他	が	か		35	1			36	
合計			7	52	23	3	8	4	97

表4 付加(地の文)

	付加	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
格助詞	が	1		2				3
	の		1	2		1	1	5
	に		3	2		1		6
	を		2	1			1	4
	と	3	4					7
	で							
	小計	4	10	7		2	2	25
接続助詞	て	2	1	3	1		1	8
	で							
	が							
	から							
	に	1	1		1			3
	も	1						1
	と							
	小計	4	2	3	2		1	12
係助詞	は	1	6	8	1		2	18
	も	3		4	1			8
	や			1				1
	か							
	こそ					1		1
	小計	4	6	13	2	1	2	28
副助詞	のみ	1						1
	など	1		1	1			3
終助詞	よ							
	ね							
	な							
	なあ							
	なう							
	さ							
	ぜ							
	で							
	わ							
	や			1				1
小計			1				1	
準体助詞	の							
複合助詞	からに							
	のか							
	として			1				1
合計		14	20	24	5	3	5	71

表5 付加（会話文）

	付加	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
格助詞	が	1	1	1				3
	の							
	に	1						1
	を	2			1			3
	と		2					2
	で					1		1
	小計	4	3	1	1	1		10
接続助詞	て			1				1
	で			2				2
	が		1					1
	から							
	に							
	も					1		1
	と							
	小計		1	3		1		5
係助詞	は	1		2	1			4
	も	1		1	1			3
	や							
	か		1					1
	こそ							
	小計	2	1	3	2			8
副助詞	のみ							
	など							
終助詞	よ	1				1		2
	ね		1					1
	な		2			1		3
	なあ							
	なう	1						1
	さ						1	1
	ぜ							
	で	1						1
	わ							
	や							
小計	3	3			2	1	9	
準体助詞	の			2		1		3
複合助詞	からに		1					1
	のか		1					1
	として							
合計		9	10	9	3	5	1	37

表6 削除 (地の文)

	削除	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
格助詞	が		1	2				3
	の		1	2				3
	に			1		1	1	3
	を		2			1		3
	と					1		1
	で							
	小計			4	5	1	2	1
接続助詞	て	5	9	2		1	2	19
	で							
	が							
	から							
	に				1	1		2
	も	1	2	3				6
	と							
	小計	6	11	6	1	1	2	27
係助詞	は	3	2	4		1		10
	も		1				1	2
	や							
	か				1			1
	こそ							
	小計	3	3	5		1	1	13
副助詞	のみ							
	など							
終助詞	よ							
	ね							
	な							
	なあ							
	なう							
	さ							
	ぜ							
	で							
	わ							
	や							
小計								
準体助詞	の							
複合助詞	からに							
	のか							
	として							
合計		9	18	16	2	4	4	53

表7 削除（会話文）

	削除	前編	中編	後編	続篇	続続	新続	合計
格助詞	が		1					1
	の	1		1				2
	に		1		1			2
	を		1	1				2
	と							
	で							
	小計	1	3	2	1			7
接続助詞	て	1	2		1			4
	で							
	が			1				1
	から							
	に			1				1
	も			1				1
	と							
	小計	1	2	3	1			7
係助詞	は		3	3	2	1		9
	も		1	2			1	4
	や							
	か							
	こそ							
	小計		4	5	2	1	1	13
副助詞	のみ							
	など							
終助詞	よ	1	2					3
	ね							
	な			2	1			3
	なあ			2				2
	なう							
	さ		1					1
	ぜ							
	で							
	わ				2			2
	や							
	小計	1	3	6	1			11
準体助詞	の			3		1	1	5
複合助詞	からに							
	のか							
	として							
合計		3	12	19	5	2	2	43

On the Different Use of Particles in Two Versions of the Main Text of “Konjiki-Yasha”

KITAZAWA Takashi, HO Chol

Department of Japanese Linguistics and Japanese Literature

Abstract

The novel “Konjiki-Yasha” written by Meiji eminent writer, OZAKI Koyo, has manifold editions, between which there are a lot differences. Therefore, this paper investigated the initial edition, published by Yomiuri-shimbun, and first edition, published by Shunyodo. This paper tries to investigate how OZAKI Koyo himself re-edited the initial edition, and point out the different use of particles in two versions of the main text of “Konjiki-Yasha”, by conducting a contrastive study of the two editions. In this paper, the differences are classified as three types : 1. Substitution, 2. Addition, 3. Deletion.

Key words : OZAKI koyo, Konjiki-Yasha, textual criticism, Yomiuri-shimbun, Shunyodo initial edition, first edition, use of particles.